

第2回 郡山市まち・ひと・しごと創生総合戦略有識者会議

議事概要

日時：平成27年7月27日（月）

13:30～15:30

場所：郡山市役所西庁舎3階多目的ホール2・3

○開会

○郡山市挨拶

政策開発部長） お忙しい中ご出席ありがとうございます。今回は2回目ということで、より具体的なご意見をいただければと思います。

○座長挨拶

内藤座長） 前回は時間を超過してしまっただが、今日も盛りだくさんの内容なので効率的な運営をしていきたい。

○報告（事務局）：略

（1）第1回会議における意見について（資料1）

（2）アンケートの発送について（資料2）

事務局） 報告を受けて何かありますか。

（なし）

事務局） 以降の進行は内藤座長にお渡しします。

○議事

（1）市内の優良事例について（資料3）

内藤座長） まず最初に市内の優良事例の報告を上田座長職務代理者、藤田委員の2名にお願いしている。

上田座長職務代理者） 第一回を欠席したので、最初に自己紹介をさせていただく。昨年の4月に日大工学部の教授となった。郡山市に来て1年半になる。生まれは富山県で高校まで富山、大学進学で上京し、卒業後はNTTの研究所に25年勤務した。専門は情報通信ネットワークの開発。家族は東京に残して私は単身で郡山に来ている。

今回は1点目として地元郡山の日大工学部に通う学生の入学から就職までの

流れ、2点目は学生が地元での就職についてどのように考えているか、最後に3点目として大学が地元の産業界と連携して取り組んでいるインキュベーションについて報告する。

1点目。2010年からの日本大学郡山キャンパス志願者の状況をみると、震災以前から郡山キャンパスについては定員割れとなったことはないが、2012年は震災の影響で志願者が減った。去年から震災前を上回る志願者数となった。出身地域の構成は震災前後でほとんど変わらず福島県内から10%、県外から90%、うち関東からの志願者が50%となっている。優秀な学生が東京に流れているということかもしれないが、郡山に魅力がないということではないと思う。郡山キャンパスには工学部しかないので卒業後は技術者を目指す学生が多い。卒業後の進路は建設業>製造業>サービス業の順に多い。日大には東京に生産工学部もあるが工学部全体で同様の傾向となっている。

2点目。学内の就職指導課のヒアリング等によれば、震災以降、地元郡山で働きたいという学生が増えた。就職希望業種は技術系の会社だが、地元で募集があるのがサービス業なのでサービス業に就くという学生が少なくない。技術系の指導者としては残念なことだが、私の学生にも自動車ディーラーに就職した学生がいる。求人と実際の就職先の地域別割合を比較すると、就職先は東京が約30%、福島は約25%となっているが、求人はもっと関東の比率が高い。福島県の求人は全体の15%くらいだが、学生が自分で地元で就職先を探して地元で就職している状況。震災からの復興に貢献できるという理由から、地元で地方公務員になる学生も多い。都内の理工学部は大学院進学率が25%程度。技術系学部は大学院まで行く学生のほうが課題解決力があると個人的には思うが、郡山キャンパスからは残念ながら大学院進学率は低い。

3点目。地元で働きたい人に職を与えられないかということもあって、大学としてインキュベーションの取り組みを行っている。大学単体で行っているものと郡山テクノポリス推進機構と行っているものがある。詳細は資料をご覧ください。震災後はLOHASというテーマで環境に貢献する技術に着目して取り組んでいるが、まだ具体的な成果は出ておらず道半ばという状況。

内藤座長) 続いて藤田委員からの優良事例紹介。

藤田委員) よろしくお願ひします。今日はこのような格好をしているが普段は農業をやっている農家。農業者として震災、特に原発事故のダメージを受けてきたが、震災後に仲間の農業者と一緒に取り組んできた郡山の野菜のブランド化について報告したい。

原発事故によって福島の農業にどのような被害があったかというのと、1)フ

ロー、2) ストック、3) 社会関係資本の3つに被害が出た。フローとストックについてはお金に換算しやすく、お金で補償も可能だが社会関係資本については被害も測りにくく再構築も難しい。まず取り組んだのは放射線量検査だが、事故でマイナスになってしまった評価を0に戻す「復旧」のための検査だけでは疲弊するので、発想を転換して「復興」を目指して付加価値を生み出そうとしてきた。

震災から2年目くらいに、いわき市の農家さんと話していて「以前から農業が抱えてきた問題を風評被害のせいにしてこなかったか」という話になった。震災で克服できない問題が起こってしまったと考えるのではなく、対策が打てるのではないかと考えるようになった。「マイナスを0に戻すのではなくて、マイナスをプラスにするためにより良いものを作っていこう」、「福島では震災もあったけどいいものを作っていることを知ってもらえるようにしよう」と考えた。例えば、不良の子が捨てられた子犬を可愛がっているのを見てときめく「ギャップ萌え」というのがあるが、原発事故で悪いイメージが持たれるようになった福島でいいものを作っているという「ギャップ萌え」があってもいいと思った。

復旧のために費やされるお金は費用だが、復興のために投じられるお金は投資ということになる。同じお金を使うなら投資のほうがいいと考えた。結果として我々は「震災があったから特別なものを作るということではなく、今まで通り技術を磨いて、それを情報発信して外に打って出ていく」という原点に回帰することにした。これが震災から3年経った現状。震災前から米価が下がっており、それに対抗するために郡山ブランド戦略という取り組みを行っていた。震災があったがこの取り組みは続けていこうということになった。

郡山は開拓地であり伝統的農産品がないが、逆に新しいものに取り組みやすいという面もある。農産物のブランド化をする場合、京野菜のように伝統的な野菜を見直して特産品にしていこうというパターンが多いが、伝統がないところでは難しいということもあった。生産環境と地域資源を分析したうえで、郡山50万商圏の食卓を豊かにするために何を指すか、農業に限らず考えてきた。我々は農家でありできることには限界があるが、「食」全体に広げていくため様々な人々とつながっていこうということで、料理人の人に野菜の力を引き出してもらおうフレンチレストラン「福ケッチャーノ」の営業を始めた。もう一つは消費者と直接コミュニケーションをしながら野菜を販売する「開成マルシェ」を展開している。「開成マルシェ」を気に入ってくれた東京の人がツアーを組んできてくれるようになって、パンフレットまで作ってもらった。8月には青山で糸井重里さんの「ほぼ日刊イトイ新聞」と組んで自宅で稲の栽培をする小さな田んぼセットの販売を行う。

郡山はなんでもできるから一つのものに頼らない。ブラインドテストによる全国野菜品評会でもトップレベルの評価を受けている。十分安全性を検査した上で自分たちの作っているものの良さを発信していくことによって原発事故の影響があっても付加価値をつけていくことはできるということをお伝えして、私の報告を終わりたい。

内藤座長) 質問等あれば。なければ私から。ブランド化の条件は数が少ないものを高く売るということもあるが、我々は「安くていいものを」という幻想に囚われている面もある。「いいものを高く売る」ということも必要なのではないか。

藤田委員) 二律背反になるが、高く売りたいという一方で普段づかいの野菜としても使っていただきたいという矛盾した目的を持ちながらブランド化に取り組んでおり、両方あっていいのではないかと思っている。フラッグシップとして No.1 を目指すものは値段が高いが、何気なくスーパーで買っていたものを郡山産に切り替えたらず少食生活が豊かになる、これをブランドとっていいものかどうかかわからないがその両方を目指している。震災後聞いた例だが、ブランド価値向上を目指していたが、実際の売り上げを支えていたのは自社の名前もでない大量生産品だったので、高級品の開発を止めてしまったという例があって、もったいない話だと思った。自分は経営を支える一般の品物と、ブランド価値に繋がる高級品の両方あっていいと思う。どちらか一方に絞る必要はないと思う。

内藤座長) またあとでいろいろ意見交換させていただければと思う。続いて事務局から「郡山市の人口の現況、動向と課題について」「郡山市の地域資源と活用に向けた課題について」一括して説明したあとで、各委員からご意見を頂く。

- (2) 郡山市の人口の現況、動向と課題について
事務局より(資料4)について説明(略)
- (3) 郡山市の地域資源と活用に向けた課題について
事務局より(資料5)について説明(略)

内藤座長) 人口の話になると数字が多くなるが、質問あれば。
(なし)

郡山の人口の現況動向の話、資源の活用の話について順番に意見を伺ってきたい。上田委員から名簿順で。郡山市に来られて1年ということで新鮮な目で見たとご意見を。

上田座長職務代理者) 前回は議論があったようだが「郡山といえば〇〇」というものがないという話。仕事柄いろいろなところに行くので、行った先でタクシーの

運転手に昼食にお勧めのものを聞くのだが、「ない」と答えられたのは郡山が初めてだった。慎み深い文化ということで個人的には好感を持ったが、住んでみて思うのはいいものは多いし、食べ物も美味しいが他のところがないと言えるものは確かにないのかもしれない。福島頑張ろうというのは東京のテレビでも言われるが郡山の名前はでてこない。郡山は福島じゃなくて群馬だと思っている人もいて、イメージが繋がっていない。東京に近い、関東だと思われる。

内藤座長) 「仙台の向こうでしょ」と言われたこともある。続いて大和田野委員。

大和田野委員) 前日も出ていたが、郡山はなんでもあつて満ち足りているところがある。長期的には人を惹きつける、住みたい・住み続けたいと感じてもらうことが大事。「郡山といえば〇〇」というものを作って発信していく必要がある。自分の娘が出張の途中で郡山に寄って「半日しかないけど、どこ見たらいい？何食べたらいいい？」と聞かれてさっと答えが出てこない。なんでも美味しいしいろいろあるということの裏返しなのだが。

前回、産総研には単身赴任の職員が多い理由は何かという話になって、こちらで奥さんが仕事を見つけられないのではないかという話もあったが、子どもが生まれるのでこちらで一緒に暮らそうということで調べてみたら子育て支援策が一杯あったという心強い話もあった。戦略としては「住みやすいまち」「住みたくなるまち」を目指していくことが大事。

内藤座長) 続いて小川委員。出生率を上げろと言われても簡単な話ではないと思うが、郡山は子どもを持つ女性の目線から住みやすいまちになっているか。

小川委員) 働きながら子育てをしている女性を見ていると、三世代同居の人が多いような気がする。子育てをしていると地域や学校の活動にも出なければならぬのでやはり女性に負担がかかる。職場環境はそれぞれ違うので、市の方で支援ができるかというとずれてくる面もある。

内藤座長) 全般的なご意見でもいいので他にご意見はありますか。

小川委員) 県中地域や郡山市内にある公立の商業系・工業系の高校の卒業生のうち、進学しない子たちはほぼ地元に残るという話を聞いた。ということは住みやすいのだと思う。なのになぜ人口が増えないのだろうと思うし、何か理由があるのだと思う。住んでいる若い人にとっても郡山市は住み続けたいまちなのだろうが、何か足りないのではないかと思う。

内藤座長) 続いて小松委員。

小松委員) 国の指針もあり短期間で人口動態の分析をしなければならないというのはわかるが、郡山市全体の人口がどうなるかというのは生活者の実感として意味のない数字になってしまう。市民にとっては自分の住んでいる地域の小学校が維持できるかどうかといった地区単位の話の方が重要。アンケートは地区別の集計ができるようになっているので、都市単位の人口移動からみた課題だけで

はなく、地区の課題を分析してほしい。

郡山市の資源の活用の課題については商業の中心地とその周辺の農山村という関係性を生かして、農山村を観光交流や移住だけでなく、都市側の子育てや教育の課題解決に繋げたい。農山村の目標は地区ごとにより異なる。来年度以降も地方創生は続くので、地区ごとの目標を考えてもらいたい。

内藤座長) アバウトに市全体で 30 万人必要ということではなくて地区ごとに必要な人口を合わせたら 30 万人だったという形。

小松委員) 農山村は人口の維持だけを目標に掲げるのは厳しい。今の地域を維持するために最低限必要な人口が地域ごとにある。一律に維持すべきというものではない。

首藤委員) 震災後の不安から転出した人はいるのだと思うが、震災前から郡山は通過点になっていたように思う。例えばお父さんの転勤で郡山に来たが、家は元いた長野に建てて子どもが成長したら長野に戻るとか、仙台に転勤になったから仙台にマンションを買うというような話をよく聞いた。家族が郡山に住んでお父さんが他に単身赴任という形にはならない。郡山市は子育て支援が手厚くて、医療費無償の年齢が上がったりといったこともある。そのような支援が使えるうちは使って、子どもが大きくなったら他のところに定住するというケースがある。

郡山の No.1 を見ていると思ったのはもっと他の No.1 が増えればいいのか、日々の生活の中で感じられる幸せがたくさんあるほうが子育て中の親子としては住みやすいということ。「私たちは郡山に住むから転勤ならお父さんだけいけば？」というようになればよい。野菜の話があったが、ブランド化の弊害で私たち一般庶民から遠くなってしまおうような気がする。東京だと高い野菜が郡山に住んでいる人は安く買えるとか、郡山に住んでいることのメリットがあればよい。No.1 を増やすことは東京向けのアピールにはなるかもしれないが住民にはアピールにならない。

内藤座長) たとえば、幸せ指数を定義してみたら、郡山は結構高いのかもしれない。

首藤委員) 何人産んでも住みやすいまち郡山。あと、子育て中のお母さんには少しでも仕事を通じて社会貢献したい人が多い。プラスマイナスを考えればマイナスだが 2 時間の託児で仕事をしたいというお母さんのために、1 時間 500 円で託児を提供できれば、他の人と話ができたり元気になったりすることができる。そういうことは大事だが、私たちの団体だけでそれはやりきれない。転勤族のお母さんでも、子育てしながら仕事を通じて社会参加できればキャリア形成もできて、郡山に住み続けたいと思うのではないかと思う。

内藤座長) 新しい視点かと思う。

須藤(竹内委員)代理) 資料 4 について。県内でも郡山市は中核的な企業が多いこと

もあり、人口が安定的に推移する可能性が高い。郡山市内には4万人が働きにきており郡山都市圏は60万人規模ということもある。人口減少への対策としては、県内出身の学生が県外の学校に通っても市内で働きたいという人が多いということなので、市内の企業が学生にとって魅力的であること、魅力的な企業を誘致することが必要。魅力的とは何かというと、働きがいがあることと結婚して子どもを育てられる安定した収入があること、奥さんや子どもが安心して暮らせる福利厚生といったものになる。

内藤座長) 時間もなくなってきたので取り急ぎ。丹野委員。

丹野委員) 郡山は他の地域と比べると恵まれている。将来人口をみても2040年時点で30万人いるということは農山村と比べれば相当恵まれていること。定住人口を増やすということよりも交流人口を増やすことを目指すべき。たとえば中国からの観光客は地元の人のお金の10倍を落とす。観光客が増えれば地域の消費は増える。東京から近いという利点は、東京だと地価が高くて介護施設が不足しがちだが郡山であれば安くできるということであれば関東地方の人たちを呼び込める。新潟は、東京が大規模震災に遭遇した際に首都機能の代替を果たせることや上越新幹線で東京から2時間ということをアピールしているが、郡山ははるかに近い。仙台も福祉施設を作って東京から人を呼び込んでいるが、郡山はさらに近い。東京からの際立った近さを活用して、関東よりも安く福祉や子育ての環境を提供できることを売りにすれば自信を持って人を呼び込める。

内藤座長) 新潟の事例については是非ご報告いただきたい。続いて藤田委員、言い残したことがあれば。

藤田委員) 誤解があるといけないので一点。ブランド化を目指しているが首都圏を狙っているわけではなく、地元で食べていただいている野菜が美味しいものであるということを知ってもらって、美味しい野菜を適正な価格で提供していく、郡山に住んでいれば普通に買える。郡山を離れてみると郡山の野菜の美味しさに気づく。外から来た人はこんなに美味しい野菜を普段から食べているのかと思ってもらう。それがブランド化の目的。食の分野では地元で当たり前のことが周りから見ると特別ということがあってもいい。もう一点。紹介すべき飲食店がなかなかないという話があったが、単に知られていないだけでそれはまずいことだと思っており、現在、郡山ブランド野菜を使っている飲食店のリストを作ってお店のPRを農家からもするというのを今年度の目標にしている。最後に一点。郡山市のNo.1を出しているが、私は以前から郡山市はハブ都市になるべきだと考えていて、郡山市は福島県の何処かに行くには必ず通る場所なので、福島県内の素晴らしい場所を郡山からの行き方も含めて発信していく。アクセスに恵まれていることを生かして、県内の他地域、東北の他地域の役に立つハブ都市を目指していった方がいい。

内藤座長) 続いて松原委員。メディアの立場からお願いします。

松原委員) 郡山に住みたいと思ってもらえるかどうかが一番大切。郡山に住めば市からも補助があって女性が子どもを預けて働ける制度もあるということであれば、郡山に住んでみたいと思う人が増える。人口にどのように影響がでるかはわからないが減少は抑制できるのではないか。そのためには働きたい会社が市内にあること。なければ誘致することが重要。

また、連携中枢都市圏の話についてだが、この会議で作る総合戦略と連携中枢都市圏はリンクするのか。

内藤座長) 事務局からありますか。

事務局) 連携中枢都市圏は地方創生の4本目の柱と国も謳っている。連携中枢都市圏が目指すところは地域経済の牽引。今回のまち・ひと・しごと創生の柱の一つは仕事づくりであり、大きな方向性は同じものと考えている。連携中枢都市圏は、都市圏ビジョンを作ることになっており、各自治体の総合戦略との整合が図られるものと考えている。

内藤座長) 最後に吉田委員。

吉田委員) 郡山市の人口については多くする必要もないし少なくともいけない、ちょうどいいところという話があった。最近いわき市や福島市に家があって、郡山に住んでいる若い人に話を聞いたが、いわき市や福島市の方が税金が安いので住民票を戻したいという話があった。郡山市の税金は全国的に高い水準と聞いたことがある。自分は気にしたことはないが。福島市には競馬場があり、いわき市には競輪場があるので自主財源が多いということかと思う。せつかく郡山に住んでいるのだから郡山にお金を落として欲しい。例えば食べ物ではどこでも美味しいけど特にどこがいいというわけではない。観光で言えば市内には健康にいい温泉が沢山ある。市内にいいものが沢山あるのに市民が知らない。情報発信が必要なのかと思う。

内藤座長) 新しい発見があって、女性が働きやすい環境をつくれれば郡山に住めるということだと思っていたが、働ける環境を作らないといけないということに男性目線から気付いていなかった。出生率を上げるのは難しいので、外から郡山に来てもらって人口を減らさないようにしなければいけないのではないかと、都市間競争で人口の取り合いをしなければならぬのではないかと。ブランディングや生業づくりということを考えると、郡山にはちょっとレベルの高いものはあるがトップではないというものが多いのかもしれない。中に住んでいて満足はしているけれど、外から見て目立つものはないということなのかもしれない。あと、タクシーの運転手や観光案内の人が案内できるような教育をした方がいい。あとは「佐川男子」みたいに「市役所男子」でも作ってみるとか。郡山という地名が認知されていないという可能性はある。福島は有名にな

ったが、郡山は福島にあるということが知られていない。もっと知ってもらおう努力が必要ということかもしれない。娘夫婦が東京から来て、農業青年会議所が提供する豆とトウモロコシを食べて感動して帰って行った。これだけいいものがあるのに東京の人に知られていない。具体的にどうすれば良いか、難しいが検討していきたい。ここからは意見交換の時間としたい。

丹野委員) ブランドというのは注目されるものでなければならない。注目されるものというのは自ずと高価なものにならざるをえない。でも、地元に行けばそれがふんだんにある。その両面を発信することによって「行ってみよう」ということになる。例えば新潟には安くて美味しい枝豆があるが、東京に行くとそれが高級品として売られている。地元では流通量が多いので自然と安くなる。地域で何気なく食べているものが美味しければそれはブランドになるという好循環ができればいい。フランスの高級ワインだって、地元に行けば安く買える。自然とそうなっているのも難しく考える必要はないのではないかと思う。

内藤座長) 浜松のメロン農家の話を聞いたことがあるが模様の出方で値段が変わってしまうということだった。見た目のいいものを作る率が高い農家は儲かるが低い農家は儲からない。東京で売るときは有名果物店の包み紙でくるんで人参を売ってもらおうといいかと思う。高く売れるのは一部だけだと思うので、その他の商品は地元で安く買えるようにしてほしい。ブランド化は高級品と一般向けの二分化をするように考えてほしい。出生率の話はあまりしたくないが、働きやすい環境というのはどういうものか。

首藤委員) 子どもを預かってもらえる時間帯。早くから長く預かってもらえること。市外に働きにいつている母親は 19:30 までの保育だと引き取りに行けない。

内藤座長) 企業経営者の方が残業なしという条件で募集したら女性からの応募が殺到したと言っていた。

首藤委員) 自分だけ残業しないで帰るときの空気とか、子どもが熱があるから帰らなきゃいけないというときの帰りやすさというものもある。祖父母がいる人はいいが。女性が気持ち良く仕事ができる雰囲気というものもある。

内藤座長) 最近は人手不足ということもあって、働きやすい環境にしないと人が集まらないということもあるので、冷たい視線を浴びせない文化をつくる可能性はある。

首藤委員) 長い目で変えていく必要がある。長時間預かりや子どもの急病の際にも病院と連携して預かってもらえる仕組みの充実が必要。あと、保育所はフルタイムで仕事をしている人しか預けられないが、パートタイム等で仕事をする母親が子どもを預けられる一時預かりを受けられる場があるといい。

内藤座長) いろいろ議論はあると思うが、転勤族が多い郡山に家族がついてくるようになれば人口減少が抑制できるだろうという期待を込めて、どうしたら女性が

働きやすくなるかということを考える必要があると改めて感じた。ぜひ検討していきたい。本日の取りまとめを次回の会議に反映させていただきたい。最後に何かあれば。

事務局) 先ほど吉田委員から郡山市の税金の話があったが、住民税については全国一律の計算方法なのでどこに住んでも同じ。住民税が上がるのは給料が上がったとき。土地の値段が高いので固定資産税は高い。国保税は自治体によって計算方法が違うので、高いと感じる方はいるかもしれない。法人関係では人口 30 万人以上ということで事業所税が課税される。法人市民税は郡山市は標準税率なので制限税率を採用する自治体よりは安い。

吉田委員) 税金でなく水道料金が違うというのはあるかもしれない。自治体によって大きく違うので。市民にとっては公共料金も税金と同じなので。

内藤座長) 今回のテーマとは外れてしまうが。議事は以上。

○その他

事務局) 皆さんの意見を反映して、次回第三回有識者会議では人口ビジョンの素案や総合戦略の基本方針についてお示ししてご意見を伺いたい。アンケートの結果概要のとりまとめに時間を要することと、9月4日に市役所の若手職員による地方創生に関する政策提案報告があるので、次回の有識者会議は9月7日(月)13:30から、今年4月にリニューアルした中央公民館での開催を予定している。

内藤座長) 余談になるが、京都から景観デザインの専門家の方に来ていただいて市内を見てもらったところ、中央公民館は古いものを生かしつつ新しい建物になっているということで評価が高かった。ぜひ参加いただきたい。

○閉会